

行
事
報
告



昨年11月14日、日蓮宗神奈川県第二部檀信徒信行講習会として、ハワイ妙法寺オンライン参拝ツアーを行いました。一昨年は日蓮聖人龍口法難750年、昨年は御降誕80

ハワイへ「オンライン」参拝ツアー



挨拶する岩瀬厚神奈川県第二部檀信徒協議会会長

昨年11月14日、日蓮宗神奈川県第二部檀信徒信行講習会として、ハワイ妙法寺オンライン参拝ツアーを行いました。一昨年は日蓮聖人龍口法難750年、昨年は御降誕80

0年という日蓮宗にとって大切な年でしたが、新型コロナ感染拡大のため予定された記念行事への檀信徒の参加は叶いませんでした。

そこで、楠山住職が所長を務める神奈川県第二部宗務所では、檀信徒の皆さんと一緒に参拝ツアーワイオントーク企画。

JTBやハワイ妙法寺、山村

住職の協力を得て実現し、神奈川二部全体で144名が参加、大明寺では30名の方が会館につどい一緒にツアーに参加しました。

楠山住職の挨拶に続き、一

行はハワイへ出発。ホノル

ル妙法寺で日蓮聖人御降誕8

年になりました。

昨年11月14日、日蓮宗神奈

川県第二部檀信徒信行講習会として、ハワイ妙法寺オンライン参拝ツアーを行いました。一昨年は日蓮聖人龍口法難750年、昨年は御降誕80



感染対策を万全にし、お会式、年末年始の行事、大黒祭、星まつりを行いました。ご理解ご協力に感謝いたします。

昨年は楠山住職が大明寺に入寺して20年という節目の年でした。お会式の中で総代、世話人、講中、コーラスの皆さんからお祝いしていただき、護持会から記念品「散雲鳳凰七条」(写真にて住職がつけていた袴姿)が贈られました。

住職入寺 20年をお祝い



第2回 中興の祖大妙房日榮上人

大明寺は建長5年(1253)、日蓮聖人が三浦半島に着岸されたことに始まり、明徳年間にこの地に大伽藍が建立されました。今日までの630年という長い歴史をこれから紐解いていきたいと思います。研究者は、住職の孫で立正大学大学院生の楠山泰誠上人です。

の大明寺の歴史

系譜)から、その生涯を考えていく。

日榮上人の師である日静上人は、永仁6

(1298)年に生まれ、後に六老僧(日蓮聖人の本弟子)の日朗上人の本弟子(九老僧)である日印上人の弟子となつた。日印上人は、鎌倉比企谷の本勝寺と越後(新潟県)本成寺(長久山本成寺)の両寺を日静上人に譲り、嘉曆3(1328)年12月20日に遷化したという。その後、建武4(1337)年には、同じく日印上人の門下であり、中山(千葉県市川市)法華経寺(正中山法華経寺)三世の日祐上人が京都に上洛、弘通して日静上人を招いたことにより、日静上人もまた上洛し、日蓮聖人の松葉谷法難にゆかりのある寺と称せられ、元々鎌倉にあつた「本勝寺」という寺院を京都の六条堀川に移転させて本國寺(現在の大光山本圓寺)と名づけ、足利尊氏をはじめとする公武の帰依を受けて教勢を伸張させ、応安2(1369)年6月に72歳で遷化したという。また、永徳元(1381)年頃、関白の二条師嗣という人物によつて記されたとされる「日穆記」には、「洛中に妙顯寺、本國寺等の法華宗これあり、未だ此義を聞かず」とあり、日榮上人が活躍されている時期には、すでに本國寺は当時の京都における日蓮宗の本山21箇寺の代表格として威勢を振つていたといふ。

以上の日蓮聖人、日朗上人、日印上人、日靜上人の法脈を京都本国寺派といい、本国寺が移転された「六條堀川」という地名をもつて「六條門流」と称される。日榮上人もまたこのような法脈の流れを汲み、三浦法華堂を本拠地とし、後に大明寺を金谷に移転し、晩年まで教線を拡大したのである。そのため、大明寺の過去帳においても開祖は「日蓮聖人—日朗上人—日印上人—日靜上人—日妙上人(資料によつては日叡上人)」が第五世までの大明寺歴代となつております。開祖とされる日榮上人は、中興の祖として第六世となつてゐる。

そうした日榮上人の生涯には、教主釈尊への信心はもちろん、三浦法華堂を縁起とした日蓮聖人や日靜上人という師への深敬という思い、さらには、自らの祖父・慈父や悲母という両親への報恩が窺えるのではないか。どうか。



(上)開基堂に安置される大妙房日榮上人(中央)と石渡平三郎則次夫妻の坐像 (下)新迦陵堂に安置される日靜上人坐像

0年法要に参列した後、才媛の神奈川県第二部宗務所を「金谷山大妙寺」の開山とし、応永6(1399)年に伽藍を整備して自らを「金谷山大妙寺」の開山とし、応永8(1401)年に伽藍を整備して自らを「金谷山大妙寺」の開山とし、応永8(1401)年11月26日に遷化したといふ。しかしながら、日榮上人の生涯についての記述は、生年月日や出家時の年齢、僧侶としての活動等、不明な点が多い。そこで、今回は日榮上人の法脈(日蓮聖人の教えの

法脈を京都本国寺派といい、本国寺が移転された「六條堀川」という地名をもつて「六條門流」と称される。日榮上人もまたこのような法脈の流れを汲み、三浦法華堂を本拠地とし、後に大明寺を金谷に移転し、晩年まで教線を拡大したのである。そのため、大明寺の過去帳においても開祖は「日蓮聖人—日朗上人—日印上人—日靜上人—日妙上人(資料によつては日叡上人)」が第五世までの大明寺歴代となつております。開祖とされる日榮上人は、中興の祖として第六世となつてゐる。

そうした日榮上人の生涯には、教主釈尊への信心はもちろん、三浦法華堂を縁起とした日蓮聖人や日靜上人という師への深敬という思い、さらには、自らの祖父・慈父や悲母という両親への報恩が窺えるのではないか。どうか。